

第11回 佐野隆治会長②

かつてない英語教育を目指した学院

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



佐野学園の創立者、佐野公一氏は終戦直後の東京で人々が求める必需品を製造・販売し、事業家として成功を収めました。公一氏は妻のきく枝氏とともに、生涯の夢であった人間教育を実現するべく、昭和32（1957）年に「セントラル英会話学校」を立ち上げました。この学校は後に神田外語学院となり、外国人教員による指導と先端のメディアの活用によって、日本最大の英語学校へと成長していきます。長男である佐野隆治会長が学院の成長の日々を振り返ります。

親父（初代理事長・佐野公一氏）が神田で経営していた喫茶店の裏に、「千代田予備校」という学校がありました。近所だから親しかったのでしょね。「お茶の水に引っ越すから建物を買わないか」と持ちかけてきたそうなんです。親父はもともと学校をやりたかったからこの建物を買うことにしたようです。

予備校の先生や生徒も引き受けて、昼は予備校、夜は英語学校を始めました。親父とおふくろ（第2代理事長・佐野きく枝氏）は以前、貿易商を営んでいた時期もありましたから、仕事に役立つ英語ができる若者を育てたいと思っていたのでしょね。

英語学校を始めるときに、親父はまず、東京外国語大学の学長である小川芳男先生（※1）に会いに行ったんですよ。それも唐突にです。面識なんてありません。でも、親父はまったく気にしなかった。並外れた度胸があったのでしょね。小川先生のところに行って、「英語学校をやりたいのです。どうすればよいか教えていただけないでしょうか」と頼み込んだのです。



小川先生のお弟子さんに堀江さんという方がいらっしゃった。この方に、どんな授業をすればよいか、先生はどうやって集めればよいかアドバイスをいただいた。親父は新聞で募集をかけて先生を集めました。  
(1/6)

1. 小川芳男（おがわよしお） 明治41（1907）年生まれ。戦後の日本を代表する英語教育者。昭和36（1961）年から44（1969）年まで東京外国語大学第3代学長を務める。昭和62（1987）年、神田外語大学の初代学長に就任する。平成2（1990）年、学長在任中に逝去。享年81歳。

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第11回 佐野隆治会長②  
かつてない英語教育を目指した学院



**神田は日本の外国語教育が始まった場所  
「神田外語学院」にしようと親父に提案した**

あの頃は、講師と教室、黒板があれば学校はできるという時代でしたよね。神田にはかつて日米英会話学院という実践的な英語を教える学校がありました。ですが、四谷に移っていたので、当時の神田には他に英語学校はなかったと記憶しています。

昭和32（1957）年の設立当初は、「セントラル英会話学校」という学校名でした。その後「セントラル米英語学院」という学校名の時期もありましたが、文献を調べてみると、東京外国語大学の前身、「東京外国語学校」や「東京外事専門学校」は神田にあったんですよ。今の、岩本町や駿河台あたりに校舎があった。日本で初めて外国語を教えた学校が神田にあったということです。

せっかく外国語教育の歴史を感じさせる場所にあるのだから、カタカナを使わずに、「神田外語学院」にしようと親父に提案しました。分かりやすいしね。昭和39（1964）年1月のことです。

最初は堀江さんに学院の事務長をお願いしていましたが、その後は僕が引き継ぎました。新聞広告で学生の募集をしたり、宣伝や広報をやりました。ただ、先生の募集だけは親父がやるんですよ。僕は29歳。まだ若かったからね。親父には人を見る目があったと思いますよ。だから、よい先生に来ていただいて、学校もうまくいくようになった。生徒はどんどん増えていきましたね。



同じ頃に、神田駅の北口のほうに新校舎を作ることになり、予備校は辞めて、英語の教育に専念することになった。どんな英語教育をするか？

親父も、おふくろも、そして僕も、誰ひとりとして英語の専門家なんていませんでした。英語の教育論については、まったくの素人だったのです。

親父が決めたのは、外国人の先生を採用することでした。それも1人や2人ではなくて、ほとんどの教員を外国人にすると決めました。日本人の先生なんて、ほんの数人しかいませんでしたよ。(2/6)

第11回 佐野隆治会長②  
かつてない英語教育を目指した学院

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**生徒さんたちは仕事が終わってから学校に通う  
大変だから、学校は駅の近くでなくてはいけない**

当時、日本の学校では、英文科を卒業した先生、つまり英文を読める先生が英語を教えていました。話せるわけではありません。だから学院では、外国人の先生を採用して、彼らに任せたほうがよいと考えた。ヨーロッパの国々には自分たちの言葉を植民地で教えるための語学教育法があった。違う母国語を話す人々に外国語を教えるには、そういう方法論が必要なんですよ。

外国人の先生を大勢、雇おうということになって、僕は親父に「外国人の先生でよい教育をするのだから授業料を上げよう」と提案しました。外国人を雇うのにはお金がかかりますからね。親父は結果的にOKしてくれました。必ず一言何か言うけれど、物わかりはよかったですよ。外国人の先生が大勢来てくれたから、夜間部も外国人の先生でやろうということになりました。

夜間部をやるときに親父に言われたのは、「生徒さんたちは仕事が終わってから学校に通う。大変だから、学校は駅の近くでなくてはいけない」ということでした。その通りだと思いました。親父も学生時代は、苦勞して学んだようですから、そういうことに気づいたんですね。

昭和44（1969）年、学校法人佐野学園を設立しました。数年前から親父は「学校は学校法人にしたほうがいい」と言うようになっていた。振り返ってみると、あのときの親父は偉かったと思います。学校法人にするってことは財産を国に寄付するのと同じことです。もう、学校が個人のものではなくなるんですよ。



親父は、当時のお金で2億数千万円を用意しました。色んなものを売ったようです。とにかくすごいなと思いました。普通は、個人塾で儲けていたら、寄付なんかしないですよ。それも全財産を投げ打った。僕だったら踏み切れたか、分からないですね。

もうひとつ、親父の本名は「佐野和一」だったんですよ。それが、学校を立ち上げたときに、自分の通り名を「佐野公一」に変えました。学校の経営者という「公人（こうじん）」になることへの決意の表れだったと思いますよ。（3/6）

第11回 佐野隆治会長②

## かつてない英語教育を目指した学院

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



### 学生時代から英語が好きじゃなかった 楽しく勉強できる方法をずっと考えてきた

当時の英語教育はミシガン大学が開発した「パターン・プラクティス」が主流でした。何度も繰り返すんですよ。そうしないと覚えられないんだけど、そんなのつまらないですよ。

僕は学生時代から英語が好きじゃなかった。英語が得意ではない立場で、どうしたら学生たちがうまくなるかを考えた。黒板があって、先生が説明する。そんなの面白くないじゃないですか。興味がそそられて、もっと楽しく勉強できる方法はないかとずっと考えてきたわけですよ。

昭和44（1969）年には現在の本館の建物も完成しました。その時に新しいことを始めたんです。ロングマンっていう会社がありましてね。イギリスの会社で、英語教材では大手だった。そこがマンガのフィルムを作っていたんですよ。本館の各教室にテレビを置いて、スタジオからそのフィルムを流して、先生が映像を使いながら授業をする。それができたらおもしろいだろうと発想しました。

親父に相談すると、最初は「そういうもので言葉を覚えられるのだろうか」と疑問を呈していましたが、最終的にはOKしてくれました。運よく、そういった機器に強い若い連中とも出会うこともできたから、導入することができたのです。



実際にやってみると、学生たちには好評でしたね。神田外語の人気も上がりました。当時はまだ、教育にビデオを使うことなんてなかった時代でしたからね。それにマンガでしょ。学生たちは興味を持ちますよ。当時の学院には、今の視聴覚教育の原点となる試みがあったんですよ。

その次はLL (Learning Laboratory) を始めました。当時、ある雑誌で米軍がヨーロッパに進出したときの記事を読みました。フランス、ドイツ、イタリアといった国々に将校を派遣する。言葉が分からなければ現地で情報収集ができないから、将校たちは、LLで徹底的に現地の言葉を覚えてから現地に送り出された。これを英語でやってみようというのがLLの始まりでした。(4/6)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第11回 佐野隆治会長②  
かつてない英語教育を目指した学院



**CAIの事業自体は、結局、赤字で終わった  
ちょっと時代より早かったんでしょうね**

こうやって、学生はビデオを見たり、LLで授業をやったりと、黒板での勉強から離れていきました。これが新しい英語教育のスタイルである「キフルメソッド」の始まりです。語学教育で初めてビデオを使い、LLで音を聞き、授業は外国人教員が行うのです。

僕自身、英語が好きじゃなかった。だから、キフルメソッドを発想できたのだと思います。それに僕は怠け者だから（笑）。できるだけ楽をする方法を考えたんですよ。

昭和49（1974）年にはコンピュータを使った語学教育を開発しました。CAI（Computer Assisted Instruction）です。当時はまだ音声認識ができなかったから、文字でのやりとりでした。コンピュータの画面上に文章が出て、質問をしてくれる。答えを英文で書いて、間違えると直してくれるのです。

当時の英語教育はどうしても先生に教わる「受け身」の授業でした。もっと能動的な教育ができないかと思っていた。このシステムは、英文をタイプすると、それに対してコンピュータが返事をしてくれるというものです。これは昭和50（1975）年にフランスのマルセイユで開かれた世界学術会議でも発表しました。画期的なシステムとして、大きな反響がありましたよ。



CAIはうまくできたから、話題にもなった。システムとして売り出そうとしたんだけど、当時は今みたいにコンピュータが普及していなかった。ハードが高いんですよ。CAIの事業自体は、結局、赤字で終わった。ちょっと時代より早かったんでしょうね（笑）。

この時期はよく仕事もしたけど、よく遊んだね。本館の裏には「神田浴場」という銭湯があって、仕事が終わると風呂を浴びてさっぱりして、それから飲みに行っていましたよ。（5/6）

第11回 佐野隆治会長②  
かつてない英語教育を目指した学院

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**専修学校になっても、編入を認めしてくれない  
自分でやるしかないから、大学をつくることにした**

学院では昭和45（1970）年ごろから第2外国語を選択必修にしました。世界は広い。いろんな言語があり、いろんな文化があることを実感してほしかったからです。言葉の数だけ異なる文化があり、それを本当に理解できれば、戦争も起きなくなる。言葉と文化は切り離せないんです。

当時の学院はとても学生に厳しかった。2年生に進学するときに単位が足らなければ留年ではなく、退学です。お金を払って来るわけだから、遊んでいても仕方がないでしょう。授業料を納めなくていいから、ほかのことをやればいい。若い人生を無駄にするな、という考え方です。勉強しなければ退学するのは、外国では当たり前のことです。外国の人と仕事をするには外国の基本的な習慣や考え方を理解しなければならない。勉強しない学生を退学にしたのも、国際的な常識を身をもって体験させたかったからですよ。

本当に大勢の学生諸君が来てくれました。すると、2年間じゃおもしろくない、もっと勉強したいという学生も出てきました。2000人も卒業生がいれば、数十人は大学に進学したいと考える。事務長をやっていたから学生たちの声はよく聞いていました。でも、その頃の神田外語学院は各種学校だったから、大学に入るには受験して、1年生からやり直さなくてはいけなかった。



昭和51（1976）年に専修学校法が制定されて、神田外語学院もすぐに認可を受けました。専修学校は卒業すると短大卒と同等の資格を得られます。制度的には、専門学校から大学の3年次に編入できる。でも、世間は認めませんでした。大学が受け入れてくれないんです。国や世間に腹を立ててもしょうがない。世の中なんてそんなものです。だから、自分でやるしかなかった。それで大学を作ろうということになったわけですよ。（6/6）

**（次号に続く）**

**佐野隆治（さのりゅうじ）**

昭和9（1934）年東京生まれ。慶應義塾大学法学部中退。昭和38（1963）年、神田外語学院の前身であるセントラル米英語学院の経営に参画、以来、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たす。昭和63（1988）年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22（2010）年、理事長を退き、会長に就任する。平成29（2017）年3月永眠。享年82歳。